

第三十八回ハイドンの交響的作品の理解に向けてーソナタ形式

◎ハイドンの交響的作品（ジャンル）：交響曲、独奏協奏曲、協奏交響曲

◎「ソナタ形式」

Point 1. : 部分構成と調性構造

歴史：

・バロック時代

舞曲に見られる2部形式…終止（カデンツ）、主調 - 属調（or近親調）への転調
オペラ序曲…展開的部分の発生

・古典派の時代

ハイドンらによる「完全な（厳格な）」ソナタ形式？

ベートーヴェンによるソナタ形式の拡大…序奏、コーダが付け加えられ、推移部に旋律的主題が見られる。

※動機的主題の循環的展開によって「第5交響曲」をソナタ形式の頂点とする？

ロンド・ソナタ形式

協奏ソナタ形式

・ロマン派の時代

調性の拡大

第2主題の歌謡性の充実

提示部の繰り返しの省略

※19C半ばにソナタ形式の定式化の動きが見られるが、同時により自由な形式となっていく。

Point 2. : ソナタ形式の成立

・「ソナタ形式」の語はロマン派の時代に成立：

1824年にアドルフ・ベルンハルト・マルクスが初めて使用し、『作曲教程』（1845年）では、ソナタ形式について、2つの主題を中心とした3部分構成とするという記述がみられる。

・「協奏ソナタ形式」は古典派の時代に成立：

Tutti（管弦楽）で第1、第2主題が同一調で奏されたのち、Eingangと呼ばれる導入によりソロ（独奏楽器）

が、提示部の2つの主題を主調と属調といった近親調で演奏する。※冒頭からソロが演奏されることもある。

展開部、再現部を経てカデンツァというソロのみの部分が入る。※カデンツァは本来即興演奏によるものだったが、ベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第5番」で作り付けのカデンツァが書き込まれた。

ロマン派以降、協奏ソナタ形式はより自由な形式に取って代わられる。

◎「主題労作」：

ソナタ形式の部分構成、調性構造、2つの主題の対比などによる非連続性の中に連続性と統一感、形式感を持たせる。

Point 3. : 主題労作の原理

分解と連結（関連）→繰り返しと変化

連続と非連続→拡張（延長）と対比

◎楽曲分析：

Point 3. : ソナタ形式と主題労作

交響曲第 45 番 嬰へ短調「告別」Hob. I~45 (1772 年作曲) 第 1 楽章、第 4 楽章

- ・グリジナー、ディースによる第 4 楽章の退出の逸話
- ・シュトルムウントドラング時代の特徴を持つ→1766 年~73 年の 20 曲の交響曲のうち 5 曲が短調
- ・18 世紀の 7000 曲の交響曲のうち短調は 2%、ハイドンの交響曲では 10%
- ・嬰へ短調で書かれた交響曲は 18 世紀で唯一で、調設定も多彩。

第 1 楽章：ソナタ形式

- ①第 1 主題…*fis*-*moll* の 4 小節から成る 4 分音符による下行の分散和音の音形が T-D-T と 3 回繰り返され、4 小節のトレモロの音形によって終止する 16 小節から成る。
- ②第 1 主題を支えるセカンドヴァイオリンのシンコペーションはモーツァルトに典型的な音形
- ③第 2 主題…第 23 小節～*cis*-*moll*→*A*-*Dur* 提示部の結尾句としての役割
展開部の ♪ の後、第 108 小節～*D*-*Dur* 新たな主題？

Violino I

Violino II

① ②

③

1. 2.

③

pleno

pp

第4楽章 Presto 部分：ソナタ形式

①Presto 部分は fis-moll、完全な（厳格な）ソナタ形式の部分構成と調性構造を持つ。

Adagio 部分は ABACoda の三部形式。Presto 部分は fis-moll の半終止で A-Dur、Adagio 部分につなげられる。

②第1主題…fis-moll の8小節から成り2回繰り返される。その後、第17小節～推移部

③第2主題…第25小節～A-Dur 旋律的性格を持たないが、第47小節までの23小節間延長され、結尾部へ？

Violino I

Presto

2

2 ✓

3

4

3 ✓

チェロ協奏曲 第2番 ニ長調 Hob.VIIb:2 (1783年作曲) 第1楽章

- ・エステルハージ家のオーケストラのチェロ奏者でハイドンの作曲の弟子アントン・クラフトの為に作曲
- ・シューマン、ドヴォルザークのチェロ協奏曲とともに三大チェロ協奏曲と称され、チェロの華やかな技巧が見られる。
- ・古典的な様式の時期の特徴として、軽快な形式感としなやかな旋律を持つ。

第1楽章：協奏ソナタ形式

- ①第1主題…D-Dur、Tuttiによる6小節から成り、5・6小節は3・4小節のエコーで同音連鎖が見られる。
- ②第2主題…第13小節～A-Dur（下屬調）同音連鎖、音階的下行音形の旋律など第1主題との関連が見られる。
- ③第16小節～推移部のシンコペーションはモーツァルトに典型的な音形
- ④第21小節～Eingang

The image displays a page of a musical score for the first movement of the Violin Concerto No. 2 by Franz Krompholtz. The score is written for Violino I, Violini I & II, Oboe, and Violoncello solo. The key signature is D major (two sharps) and the time signature is common time (C). The score is divided into measures, with specific sections marked by circled numbers 1 through 4. Section 1 (measures 1-6) features a melody in Violino I starting with a piano (p) dynamic. Section 2 (measures 13-15) shows a change in dynamics to forte (f) and fortissimo (fz) in the Violini parts. Section 3 (measures 16-17) includes a crescendo (cresc.) in the Violini parts. Section 4 (measures 21-22) is marked with a forte (f) dynamic. The Violoncello solo part at the bottom of the page starts with a piano (p) dynamic and includes a measure number '6' at the end of the line.

第3楽章：ソナタ形式？ロンド形式？舞曲形式？

①第1主題（主要主題）は、14小節から成る息の長いフレーズ構成

②第15小節～第1主題の後レチタティーボとカデンツァ+〇 即興演奏も入れられた。

The image displays a musical score for the first movement of Beethoven's Symphony No. 3, Op. 55. The score is divided into two sections, (1) and (2).
Section (1) consists of four systems of staves. The first system shows Violin I and Violin II parts, both marked 'arco' and 'f'. The subsequent systems continue the violin parts. The key signature is two flats (B-flat and E-flat), and the time signature is 3/4.
Section (2) consists of two systems. The first system shows a Violin I part marked 'Solo' and a Cello part marked 'f'. The second system continues the solo violin and cello parts.

イグナツ・ブレイエルは1792年2月27日第3回ザロモン演奏会で6つの独奏楽器の為の協奏交響曲を初演した。
ヨハン・クリスチャン・バッハもロンドンで協奏交響曲を書いている。